

# 非実在 ~Airmys~ 探偵小説研究会

エアミステリ

弐

號



エアミステリ研究会

# 非実在探偵小説研究会 2号 目次

## 読み切り短編

悪戯好きの死神	麻里邑主人	5
いらつしやいませしごちそうさま	二丁	36
おいしいパンケーキの食べ方	二丁	82
「ファントム・ペイン」	方功鉄文	86
麻耶雄嵩を読んだ男 密室荘	二丁	123
ロスト・ネーム	桜居志連	132
『Zの悲劇』11』	皐月あざみ	151
さらば貧しき乳よ	タイガー田中	159

## 企画

企画1 お題競作	佐倉丸春	40
コンビニエンス・サガ	紫藤陽花	55
こいのゆくすえ		112
企画2 私が愛した本格ミステリ		112

表紙・扉ページイラスト ウスダアヤ

# 企画1 お題競作

今回のお題

コンビニで発売日に週刊漫画雑誌を買っていく男。  
けれど店を出るなり毎回読むことなくゴミ箱に捨てるとい  
う奇行を繰り返している。  
果たしてその真意やいかに？

お題を元に、自由に創作をしてもらう企画です。（お題の内容はこの同人誌参加者、某氏の身近に起こった実際の出来事です）あくまで“創作”ですから『真の解答』などありませんのであしからずご了承ください。

なお、執筆にあたっては以下の補足ルールを設けています。

- ・お題で提示した以外の周辺情報は、執筆者で自由に補強して良い。
- ・謎の提示～解決までを短編にまとめる。

このお題に2名の方が挑戦して下さいました。それぞれテイストの異なった作品に仕上がっています。

では、次のページから『お題競作』お楽しみ下さい。



# こいのゆくすえ

しどうはるか  
紫藤陽花

\*

あやめは部屋に入ってくるなり、  
「先輩、締切りが迫ったような顔で脂汗垂らしてどうしたんですか」

と、ノートパソコンの前に座っているぼくを見ていう。  
いやと、首を振りつつため息をつく。ぼくが頭を抱えているのを後目に、あやめはベッドに座り、今日発売の週刊の漫画雑誌を膝に開いている。彼女がいま買ってきたものだ。

どうしてぼくが頭を抱えているか。

ぼくはインターネット上の、あるミステリ愛好家の匿名コミュニティに参加していた。そのミステリ・コミュニティでは、有志から集めた原稿で同人誌を作成し、イ

ベントや通販で販売している。ぼくの部屋にも過去に作った同人誌が二冊ほどある。

先々週の土曜日に行った同人誌の制作会議（といっても、インターネットの集まり、方法はチャットだ）で、いわゆる『日常の謎』タイプの競作をしようということになった。そのお題が目下の悩みなのだった。

『雑誌を捨てる男』——コンビニで発売日に週刊の漫画雑誌を買ってすぐにゴミ箱に捨てる男がいる。なぜそのようなことをしたのか。出題者が実際に遭遇した話だという。その話に解決をつけて短編にするというものだ。ぼくはそれから二週間、夏休みの宿題がまだ終わっていない子どものように、現在進行形で悩み続けている。

朝起きたら、ひょっとして世界が劇的に良い方へと転がってはいないか期待したのだけど、八百万の神々が住むこの国にも、すべての面倒事を一挙に解決してくれる都合のいい神様は残念なことにはないらしい。

決して締切りが迫っているというわけではない。だが、締切りまでにはなんとかしなければならぬ。なにせ、この競作のお題の犯人——『雑誌を捨てる男』の正体は、おそらくぼくのことなのだから。

「……どうしました、先輩」

そういつて漫画雑誌から顔を上げ、小首を傾げる。どうやらぼくは知らず知らずのうちにうなり声を上げていたらしい。

あやめは大学の後輩だ。

去年の春。ぼくは大学をサボって近くの喫茶店のボックス席で本を読んでいた。さて解決編だというところであとカウンター席に目をやると、そこには文庫本を読んでいる女の子が座っていた。軽くウェーブがかかった黒髪を、耳にかける。その小柄さも相まって、小動物のようで実に愛らしかった。ぼくはつい、「なにを読んでいるんですか」と声をかけてしまった。「あなたは」少し警戒するようにしながら、彼女は表紙を見せてくる。「どちらさまですか」

読んでいた本のタイトルは『密閉教室』。彼女は同じ大学の一年生だった。彼女と親しく話ができるようになったきっかけとして、そのときぼくが読んでいたのが『匣の中の失楽』というミステリだったのは、無視できない要素だろう。

それ以来、あやめと付き合うようになった。共に趣味

がミステリということもあり、彼女とは話が合った。だから彼女はこうやって、大学は夏休みも半ばだというのにぼくのアパートの部屋にやってきて、まるで自分の家のようにくつろいでいる。

あやめはこの前まで塞ぎこんでおり、最近はあまり会えていなかった。もう平気なのだろうか。彼女の顔を盗み見たが特に変わった様子はなく、以前通りのあやめだった。

彼女に声をかけると、

「なあ、あやめ」「そうだ先輩」

見事に被ってしまった。ぼくはどうぞと、あやめに譲る。レディーファーストなどでは当然ない。あやめがひとにものを譲ることはしない、というのはこの一年で身に染みていたことだ。

「先輩、もしかしてネタに困ってますか」

面白い話を聞いたのですがと、彼女は首を傾げる。

彼女はぼくが創作しているのを知っている。インターネットのミステリ・コミュニティに参加していることは教えていないが、過去に同人誌へ寄稿した作品の初稿のプリントアウトを、彼女に読ませたことがあった。

あやめの言葉に曖昧に頷く。今回に限っては、ネタに困っているわけではないのだが。

「ひと月前の話ですが、飲み会に行ってきたんです。同じ学部の友人が誘ってくれて」

「飲み会だって」

単純に意外に思っただけなのだが、大きな声が出てしまっていたらしい。問い詰めたような声に、あやめは少し怯えたような顔で慌てて両手を振った。

「その……多分わたしを元気づけようと思ったんでしよう」

「ぼくは上手く回らない自分の頭を恨んだ。

「ああ……続けて」

「これは先月……そうですね七月の終わり」彼女は膝に乗せていた雑誌を閉じる。「飲み会に参加していた男のひとに聞いた話です」

\* \* \*

「あやめちゃんって、ミステリを読むんだ」

彼はそう言って生ビールに口をつけました。「ええ、

まあ……」と、一応の返事をしながら、わたしは思いま

したよ。「ああ、しまった」と。

そもそも、この飲み会にはあまり乗り気ではなかったんですよ。でも、断ることもできなくなって。

で、地味な女の子を装うために、はじめの自己紹介で「趣味は読書」といったんです。ほら、『読書と散歩は無趣味と一緒』って……いやです先輩、睨まないでください。冗談です。とまあ、そこに食いついてくる男がいるであろうことは予想していましたよ。そういう男に、わたしは愛読書として『密室殺人ゲーム』……というか、先輩も読んでますよね？ 大好きなんです、ひとをひととも思っていないことか。歌野晶午うたのしょうごさんの傑作ですが、偶然集まったような飲み会の席で、実際に読んでるひとと出会う可能性など多くないよなあって思ってた。

「だけど、まさか「歌野晶午？」って同級生と街で会ったときのような自然さで返されるとは思いませんでしたよ。「完全に失敗したなあ」と。わたしはこの場に来たことに、そして新しいチュニックを着て来てしまったことにまで後悔し始めてました。

「だったら」わたしがミステリ読みだと知って、さっきまでつまらなそうにピーマンの肉詰めを食べていた彼の口が突然回り始めました。わたしの発するネガティブな

オーラに気づきもせずですよ。多分あのひと、童貞です。

「日常の謎って、興味ある？」

日常の謎って。たしかにミステリ読みとして興味はありましたよ。先輩も知ってる通りです。でも、酒の席で語られる話に期待なんかできるわけがないじゃないですか

「ええ、まあ……」

わたしは先ほどとまったく同じ返答（もちろんんわざとですよ？）をしたのに、彼はそれにも気づかず満足そうにうなず頷き、話し出しました。

「これは俺のバイト先であった、いや、現在進行形で起こってる話なんだけどね」

テーブルの上に置かれた皿を凝視しながら早口言葉のようにいうと、残りが少なくなつた生ビールを一気に飲み干しました。

「俺、コンビニでバイトしてるんだよね。昼間から夜の十時まで。俺が気づいたのは、だいたい三ヶ月前の月曜日だったかな。なにが起こつたと思う？」

そんなこと知るかですよ、本当に。今の話で得られた情報は、このひとが昼から夜までコンビニでバイトしていることだけ。有益な情報量はゼロじゃないですか。

「えー……、なんでですか？」

……いま改めて再現してみると、キャバクラ嬢みたいな台詞ですね。なんか恥ずかしいな。とまあ、わたしが疑問で返したのが嬉しかったらしいです。彼は妙に誇らしげな顔でピーマンの肉詰めを一口かじり、ゆっくりと咀嚼しはじめました。

ひょっとしてこの男は、わたしを焦らしているのだろうかって。目の前にあるカシスオレンジを男の頭にぶちまけて、今すぐ家に帰りたい。そう思ったのですが、わたしはそれをしない程度には大人だったんです。誘ってくれた友人のメンツもありますし。さて、肉詰めを飲み込んだ彼は、ゆっくりと口を開きました。

「……あれは夜の八時くらいだったかな。……お客さんがコンビニにやってきたんだ。帽子を目深にかぶって、明らかに怪しい。俺もコンビニでのバイト長いから、注意しながら見てたんだ。で、そいつは店に入って日用雑貨の辺りを見回すと、振り返って漫画雑誌のコーナーを見始めた」

「漫画雑誌……ですか？」

「そうそう。そいつは週刊の漫画雑誌を手を取った。あれは大きいから万引きできるようなものじゃないけど、

やっぱり警戒しないとな」

わたしはあいつちをうちました。

「雑誌をレジに持って、千円札を出してきた。なんだ普通に買うのか、って思ったよ。妙にキョロキョロして落ち着きなかったけどな。おつりとレシートを手渡すと、ひったくるように受け取りポケットに突っ込んで、店から出て行ったんだ」

「……それで終わりですか？」

「もちろん」そういって彼は人差し指を立てました。「まだ続きがある。これからが一番の謎だ」

正直、わたしは少しほっとしました。こんなどうでもいいピーナッツの殻みたいにかスカスカな話で、感想を訊かれたらどうしようって思ってたので。まだ続きがあるなら、なにかしらコメントを考える時間稼ぎになるじゃないですか。

「そいつは店から出ると、余計にキョロキョロしはじめた。なんでだろうって思ったよ。万引きしたんならさっさと逃げるはずだし。ひとしきり辺りを見回すと」彼はそこで一呼吸置いて、ゆっくりといました。「さっき買った漫画雑誌を、こっそりとゴミ箱に捨てたんだ」

「ゴミ箱に？」

わたしは不意を突かれましたよ。少し予想外だったんです。どきどきしてきました。

「俺は論理的に解決してみようと思った。一応、ミスリーを読む人間だからさ。わかるだろ？」

「ええ……まあ」

先輩ならわかると思いますが……本当は、彼の気持ちに痛いほど理解できてしまったんです。目の前に出された不思議な現象は、わたしにとってテーブルに並べられたチョコレート。本来は『日常の謎』とでもいうべき展開の話は好きではないんですが……だけど、謎は謎。そう、甘いものが大好きなわたしにとって、チョコもマシユマロも好物なのと同じようにです。

もっとも、悔しかったので顔には出しませんでした。「俺はその日一日、ずっと考えていたけれど、結局なにも浮かばなかった。次の日にはそんなこと、忘れてたしな」

続きは「非実在探偵小説研究会  
2号」でお楽しみ下さい。